

呉川の街にて

外口の舟除が大黒帽をかぶつておしめの干された裏町を通つた  
おじいさんの茶まは船の肩に銃砲がぶつかかり泥靴が氷をはねた  
少年の頃どこの馬路踏下きいた異人さんめいた死かよの群かき流れ  
いれずみの牛も小ぶる行つた

つきもつる草売りのようなるかここのり將校の眼に

何か透明なものも早りサ活し<sup>た</sup>なクレートの向うの水平線が初秋が

一枚の刀物のように映つていた

何処にゆくか彼らは知るまい 草売りの將校もしらるまい

限りなくつづく金細工堀がうすけられた外口の旗をかきけ

貝殻のついた錆鉄の山が乾き

高架の上をうしろ向きに 桜園車からつぼよ白い傷兵車

労働者のまねがドラリ鏡をこころかして横切子道と

ネツカサしつる黒い水色の自動車かすこころか

いつまでもいるいっしょの向を しゃべるを背負つた女印いさんが馳けぬけよ

割り込んだ腰掛けの妙にぬくいハニハニの尻がハヌウ中んあつて

奥地に入つ陸道のしめたる臭いがライトと彩るところ

グワツト

こね区丁れた血 破れた頭蓋

りや 何でもない

西風が轉められたウサ